

旧核融合フォーラムにおいて、平成 14 年度から平成 18 年度まで実施した活動や掲載などをご覧いただくため当面の間表示します。該当する最新の内容については、核融合フォーラムの発展継承となる [核融合エネルギーフォーラム](#) のホームページからご覧下さい。

○14:40 ITER: 極内機関(予定)としての準備・検討の状況

日本原子力研究開発機構 執行役 松田 慎三郎

<質疑応答>

【香山晃(司会)】 人的貢献というところで、大学の博士課程の後半あるいは修了したばかりの方で非常に興味を持っている人がいるのだが、どんなタイプの求人がいつ頃出てきそうなのか、まったくイメージがわからない。大部分は原子力機構の方で対応できるだろうし、産業界の方が対応する部分もあるかもしれないが、大学院を出ている人が従事できる仕事で、こんなものが出てきそうだというイメージ的なものがあれば、教えていただきたい。

【松田慎三郎】 その方が研究開発に興味をお持ちの場合には、ITERのオペレーションに関係する物理活動(現在のITPAに相当する活動)を担う部署(Science Division)、あるいはテストブランケットモジュールの開発を担う部署(Technology Division)などに入るというのが一つの手である。コンピュータを使った制御などの特殊な技術をやりたい方は、制御部門(CODAC Division)に入ることになる。そのドクターを出られた方がどういうスペシャリティーかによって全く話が違ってくるのだが、籍を国内の大学院に置きながら、ある期間だけ行きたい場合には Visiting Researcher というかたちで派遣することになる。その場合には、国際機関から雇用されるのではなく、派遣する極が負担をして送り出すという客員研究員的なシステムとなる。

【小川雄一】 今の議論にも関係することだが、ITERが運転される10年後の段階で、結局、参加の形態は色々あるでしょうが、平均すると研究者の総数としてはどのくらいになるのか。ITER および BA 計画全体で研究者はどのくらい必要であると予想されているのか。また、その運営の仕方、参加の仕方がどのような形になるのか。その辺のことに、どのような議論になっているのか、わかる範囲で教えていただきたいと思う。

【松田慎三郎】 建設段階について、今、ご紹介したが、運転段階については、大きく様変わりすると思う。先ほど建設段階のプロフェッショナル(研究者・技術者)と支援要員とを区別していたが、研究者・技術者も、建設する部隊から実験する人たちに変わっていく。支援要員も、建設の支援から装置の運転の支援に変わる。構成比も絶対数も変わる。その辺はまだはっきり議論されていない。これからすることになる。その際には、チアノフ氏の科学技術部署で議論しながら進むことにはならないかと予想する。一方、人のリソースの話としては、あまり飛び抜けて増えるという想定はしていないので、規模としては、建設中の国際チームくらいの規模で推移していくのではないかなと思う。いずれにしても、これからの議論である。